ず一半。それから厨房のほうを一瞥したあと一息いれて、肉汁の溢れでぬ間にもう一半。この一連の行動は、半自動的、半無意識的である。こうして鍋貼は余り一つとなってしまった。

向かって右辺の墻では、半裸の白い積雨雲のような二人の大男が互いに相手の臂を抓み合っている。ぺしゃんとした縦深のない画である。傍で団扇を拿っている男や二人を包囲んで観ている数人の輩は服を穿いているのだが、頭は半裸の二人同様に判で押したような毛沢東風の髪型をしている。相手を抓む拇指の向きが不自然だ。他の四本の指と同じ方向に屈がっている。自分の左手で試してみるが、拇指を切って貼りつけ直しでもせねば如何しても駄目である。

玻璃越しに外を看ると、其処はすぐ駐車場である。その入口で站っている蛍光色の馬甲を穿た警備員の男は、表情が欠乏している。正面に停まっているのは現代車、その隣が馬自達、沃尔沃、奥迪、そして豊田。向うのほうには奔馳や宝馬や捷豹もある。停まっている車の大概は黒か白か銀白色である。そのぶん紅や藍の車は顕著つので找しやすい。買うとしたらそういうのが好いだろう……。

拉麺はまだ来ない。自分はこの孤単で無力で極小な最後の一鍋貼を上から呆と見つめた。鍋貼をのせた月牙状の盤の真ん中には、何か泥鰍の蠕動るような文様があることを自分は認めた。その全体像を確認するために鍋貼をちょいと夾みあげてみると、それは文字であるようだった。更にその盤を反転してみると、日語で「う」、つづいて「ま」、そして最後に「い」と写いてあるのが判った。以上の三字がやや歪んだ曖昧な配置で並んでいるので、「まいう」と読めなくもないが、この局面では「う・ま・い」という順序で読むのが恐らく最も自然だと思われた。

うまい。寝込みを襲われたようだった。遠方から狙撃手に心臓部を瞄中されたほどの衝撃ではなかったが、それは非合法な無遠慮さで奇妙なぐらい自然に深処のほうまで潜入し、何かを掠めて心のようなものに波紋を起こした。心のようなものは深処のほうで簌簌している。自分が自分を開口するよう急かす……。うまい。鍋貼はうまい。鍋貼はとてもうまい。この店の鍋貼はとてもうまい。この店の鍋貼はとてもうまそうだ。この店の鍋貼はとてもうまそうに違いない。この店の鍋貼はとてもうまそうに違いないはずだ。この店の鍋貼はとてもうまそうに違いないはずがない……。想いつくまま拡張された詞の連なりは、鏈条が外れて空転りしたみたいになってしまった……。いつの間にか、眼前には一碗の拉麺が置かれてあった。

自分は摩尔斯密碼のように点々と日語を脳裡に響かせながら、拉麺を一啜りした。それから胡椒と大蒜の粉末を少々撒りかけ、ふた切れの叉焼のうちの形の崩れたほうを筷で圧して充分に湯に浸し、それを麺に纏めて軽く夾みあげる、というまでの工程を半自動的に進行していたとき、自分のもう半分の意識のあるほうが自分の両肩を背後から抓んで強く揺すぶった……。

ちがう
そんな接木じゃ
なんの意味もなさない

「うまい」という詞は確かに外から闖入してきたのだが、たった今この嘴から発したというのも又同様に確かな事実である。言語を発信する原処は果たして何処であろうか……。外界ではない。それは自分自身だろう。言語は自分自身から発していたのだ。自分自身から……。

しかし困ったことだ。日語には各種各様な自称、一人称が存在するからである。日本人は話す相手によってそれらの称呼を用い分けているというが、自分にはそれが非常に難しく思われるのである。自分は自分に相手によって孫悟空のようにそう翻雲覆雨と変化を反復えされては、頭脳が異常くなりかねない。そのようなことは是非とも回避したいので、自分自身の称号は一人だけに限りたい。

ここにきて名告りを上げたのは、「私」、「僕」、「自分」、「俺」、そして「吾輩」、という五名の候補者である。「私」は主に成人が用いる称呼、「僕」は小孩の用う称呼と認いている。「僕」など論外である。誰が喜き好んで下人を演じたがるのだ。自分は大人でも小孩でもないので、何方も不適当である。「俺」は自分のような者には最も適した表現らしいのだが、中国では郷下人の用う詞なので、これもやや抵抗感がある。余る二名は「自分」と「吾輩」であるが、ずいぶん猶豫とした考慮の末、結局自分は画数の少ない苗条な外形の「自分」を採用することにした。

少し沈着いたほうがいい。これから自分はいったい何をしようとしているのか自分で判然としていないようだ。しかし自分が自分でそれを欲しているわけだし、それによって何か特別に自分が困ることも起こらないであろうから、このまま自分の欲するままにこの身を任せてみようとも思う。即ち、自分はこれからしばらくの間、自分が眼にしたもの、自分が覚じたこと、不意に去来した過去のことなどを、想いつくままに徒然にこの言語に載せてみては如何かと思っているのである。

Φ　Φ

自分はいま、蘇州に在る。今年の九月から蘇州の科技学院に通うことになったのである。母親からは上海に留まるよう再三懇願されたが、自分は上海を出たかった。水平の低い大学でも構わないから上海にいてくれというのだから、現代中国人的な想法からすれば失格者である。高校の朋友の大概は上海の大学に昇入するらしい。加拿大や澳大利亜などの海外へ留学する者も数人いた。日本の大学へいくのは取消にし